

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 3 区分

【発行日】平成 29 年 3 月 23 日 (2017.3.23)

【公表番号】特表 2015-507056 (P2015-507056A)

【公表日】平成 27 年 3 月 5 日 (2015.3.5)

【年通号数】公開・登録公報 2015-015

【出願番号】特願 2014-556159 (P2014-556159)

【国際特許分類】

C 0 8 J 9/00 (2006.01)

C 0 8 L 67/00 (2006.01)

C 0 8 L 23/12 (2006.01)

C 0 8 L 23/14 (2006.01)

C 0 8 L 23/08 (2006.01)

C 0 8 L 33/00 (2006.01)

C 0 8 L 67/04 (2006.01)

【 F I 】

C 0 8 J 9/00 C E S A

C 0 8 J 9/00 C F D

C 0 8 L 67/00

C 0 8 L 23/12

C 0 8 L 23/14

C 0 8 L 23/08

C 0 8 L 33/00

C 0 8 L 67/04

【誤訳訂正書】

【提出日】平成 29 年 2 月 20 日 (2017.2.20)

【誤訳訂正 1】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 2 3

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【 0 0 2 3 】

また、重合体硬化添加物は、分離したドメインおよび生じる空隙を確実に適切に維持することができるように一定のメルトフローレート（または粘性）を有してもよい。たとえば、硬化添加物のメルトフローレートが高すぎる場合、それは連続相を介して制御の及ばないほど流れ、および分散する傾向がある。これにより、維持するのが困難で、およびまた、早期に破裂する可能性が高い薄板状または板状ドメインを生じる。逆に、硬化添加物のメルトフローレートが低すぎる場合、それは共に凝集して非常に大きな楕円ドメインを形成する傾向があり、これは混合の間に分散するのが困難である。これは、連続相の全体にわたって硬化添加物の偏在を生じさせ得る。この点において、本発明者らは、硬化添加物のメルトフローレートの再生可能なポリエステルのメルトフローレートに対する比が典型的には約 0.2 から約 8、いくつかの態様において約 0.5 から約 6 およびいくつかの態様において約 1 から約 5 であることを発見した。重合体硬化添加物は、たとえば 2160 グラムの負荷にて、および 190 にて決定される、10 分あたり約 0.1 から約 250 グラム、いくつかの態様において 10 分あたり約 0.5 から約 200 グラムおよびいくつかの態様において 10 分あたり約 5 から約 150 グラムのメルトフローレートを有してもよい。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0056

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0056】

一般に上で記述した様式での冷延伸は、相対的に小さな伸長の方向（たとえば、長手方向または縦方向）に軸の寸法を有する空隙の形成を生じる。たとえば、一つの態様において、空隙の軸の寸法は、約5マイクロメートル以下、いくつかの態様において約2マイクロメートル以下または、いくつかの態様において約25ナノメートルから約1マイクロメートルであってもよい。一定の場合において、空隙は、このような空隙の少なくとも1つの寸法が約1マイクロメートル以上のサイズを有するという意味で「マイクロ空隙」であってもよい。たとえば、このようなマイクロ空隙は、約1マイクロメートル以上、いくつかの態様において約1.5マイクロメートル以上およびいくつかの態様において約2マイクロメートルから約5マイクロメートルである軸の寸法に直交する方向（すなわち、横軸方向または幅方向）の寸法を有してもよい。これは、約0.1から約1、いくつかの態様において約0.2から約0.9およびいくつかの態様において約0.3から約0.8のマイクロ空隙に対するアスペクト比（軸の寸法と軸の寸法に直交する寸法の比）を生じ得る。同様に、また「ナノ空隙」が、単独で、またはマイクロ空隙と組み合わせて存在してもよい。ナノ空隙の各寸法は、典型的には約1マイクロメートル未満およびいくつかの態様において約25から約500ナノメートルである。

【誤訳訂正3】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0082

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0082】

破損まで前駆物質の伸度を試験した後に、前駆物質棒を実施例1に記載したように50 mm / 分（87.7 %の変形 / 分）の延伸速度にて50 %の伸びまで延伸した。材料は、一様な試料の作業長さにわたって応力白化し、均一かつ一定の空隙のある構造の形成を示した。マイクロ空隙化による容積増大は、約57 %および約157 %の総容積伸長対元の容積であるの見積もられた。伸長比は、1.57であり、36 %のパーセント空隙容量の見積もり、並びにおよび1.19 g / ccおよび1.25 g / ccのPLA密度の前駆物質密度に基づいて約0.76 g / ccの材料密度の見積もりを生じた。また、空隙のある材料密度を液体置換法によって独立して測定した。この測定は、0.78 g / ccの材料密度を提供し、これは容積伸長比測定に基づいて見積もられる密度の近くにである。空隙のある材料における長手方向変形は、 $E_L = 60\%$ （0.60の長手方向ひずみ）であり、横方向変形は、 $E_t = -1\%$ （-0.01の交差方向の横歪み）であり、およびポアソン係数は、0.017であり、また延伸した材料における有意な容積増大を示した。